

# 西光寺だより

第二三八号 令和四年 二月一日発行

新年が明けて早くもひと月が過ぎました。

お正月のなごやかなひと時もつかの間、感染者が急増しています。ようやく収まりをみせたかと思うとふたたび波がくる厄介なウイルスであります。

今回は子供たちの間にも感染が拡大し、全国で休校休園が相次いでいます。子供たちには我慢の日々を再び過ごさなければならぬ現実にも、もどかしい思いが募ることでもあります。

最近、不登校や事件などが増えている理由の一つに、閉ざされた生活が続いているということもあるのではないのでしょうか。

互いに触れ合う機会が制限される日常が長く続くと、人間同士のぬくもりを忘れてしまいがちです。孤立し、つらい思いをしている人は、きつとたくさんいることでしょう。

こんな時、大切なのは自分だけでなく人を思いやる心ではないかと思えます。人はそれぞれ考え方や感じ方が違います。それは立場や環境によっても変わってくるでしょう。

それぞれは違っても誰もが大切にされるべき存在。

「相手の立場になって考えてみることに」

思いやりの心は、まずはそこから始まるのではないかと思えます。

こんなご時世だからこそ、互いをわかりあい、大切にし合えるあたたかな関係を、みんなで築いていきたいと思うことでもあります。



## ◆先月の報告◆

一月九日(日)～十六日(日)、京都西本願寺にて親鸞聖人御正忌報恩講が厳修されました。

感染症への対策を講じ、参拝者どうしの距離を確保しながらの法要でありました。

私たちもインターネット配信を利用してご一緒にお勤め致しました。参加している人全員がマスク姿でのお勤めは、なかなか慣れるものではありませんが、浄土真宗にとりまして重要な法要である御正忌報恩講。

共に参加できたこと感謝であります。

今年もどんな年になるかわかりませんが、変わらずに見守ってくれている存在がある安心を、感謝の気持ちで歩みたいと感じたことでもあります。



## ● 今月のことば ●

### コロナ禍に早梅の白のひとすじ

大谷本廟墓参の際にいただいたお話をご紹介します。

この俳句は以前、南海放送ラジオ「夏井いつきの一句一遊」という番組で紹介された一句です。

この句の季語である早梅（そうばい）とは、日当たりの良い南斜面などで咲く早咲きの梅のことで、季節に先立って咲いた花に春の近づきを喜ぶ季語です。

この俳句の作者の方は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、生活の先行きが見えずいつもより長く感じられる冬に、ふと早咲きの梅を見つけられたのでしょうか。

自分の心は不安でいっぱい、季節の移り変わりを気にする余裕すらなかったけれども、いつもと変わらずその花を咲かせ、確かな春の訪れを知らせる梅の花。

その白い花の姿が告げるのは、この私もまた同じ春を迎える大きな自然のはたらきの中にあるのだという気づきと安心。

その確かな喜びを、一筋の光と見られた俳句なのだと思うことであります。

振り返れば私たちの世間は不安な事ばかりであります。そして生まれた以上必ず年をとり、病にかかり、そしていのち終えていかねばなりません。

新型コロナウイルスの感染拡大が私たちの生活に影響を与える中に、その真実がより一層身近に感じられるようになったかもしれない。そんな時、私たちの心や生活は不安で沈んでしまいます。

浄土真宗を開いてくださった親鸞聖人は決して疫病におびえたり、死に驚いたりするようなことはなかったと伝えられています。

なぜなら親鸞聖人もまた、ひとすじの確かな光を感じておられたからであります。

その光とは、私に届いている「南無阿弥陀仏」のお念仏であります。私たちは「南無阿弥陀仏」のお念仏をいただく中に、いのち終えた時に必ずお浄土に往き、仏とならせていただく。

仏さまが「必ず」とおっしゃるのですから、私がどのように生き、どのようにいのち終えようとも変わりはない。

仏さまの「あなたのいのちを必ず、死んで終わりのむなしいのちにしない」というその大いなる安心のはたらきが、光のように今私たちに届き、包み込んでくださっているのだから、病や死で不安になることはないのだと、親鸞聖人はお示し下さっています。

親鸞聖人が慶ばれたのと全く同じ、決して変わることはない「南無阿弥陀仏」の白いひとすじの光が、今私たちを照らし、輝かせてくださっています。

合掌



浄土真宗本願寺派 白毫山 西光寺

大阪府茨木市西河原一七―二

電話 〇七二―六二二―四七九四

FAX 〇七二―六二二―九二九一

<http://www.osaka-saikouji.net/>